

書評・紹介

長崎法潤著

『ジャйна認識論の研究』

宇野 惇

我が国でジャйна教哲学を専一の研究対象として刊行された著作としては、(1)『著那教聖典』鈴木重信著、大正九年刊、世界聖典全集刊行会、(2)『印度精神文化の研究』金倉円照著、昭和一九年刊、培風館、の二書がある。本書はこれに続く第三番目の研究書であり、まさに快挙というべきであろう。著者長崎氏は現在大谷大学仏教学科の教授の職にあり、かつてインドのナランダ仏教研究所でインド哲学の權威であるS・ムケルジー博士とジャйна教学者N・タティア博士の薫陶を長年にわたって受けられた。著者は久しく仏教およびジャйна教を主要研究対象として来られたが、本書はジャйна教の一作品に基づいた研究成果である。すなわち、「カリ期の一切知者」の尊称で呼ばれるジャйна教白衣派の学僧ヘーマチャンドラ(1088-1173 A.D.)の数ある作品中、『プラマーナ・ミーマーンサー』と称する論理学書に基づいた研究である。原作品の刊本としてはPandit Sukhial Sanghavi編によるものの(Singhi Jaina Series No. 9, 1938)があり、また前記二博士による英訳(Calcutta, 1944)がある。後者は原文の英訳のみから成り、難解のためか殆んど

利用されていないのが実情である。『プラマーナ・ミーマーンサー』の和訳を含め、且つ詳細な研究と解説を附した本書の出現で、ジャйна教のみならずインドにおける認識論の概要を知る上でも最適の啓蒙書として役立つものと大いに期待されるところである。

本書は次のような構成から成る。第一部 ジャйна認識論の基本的性格 (pp. 1-105)、第二部 『プラマーナ・ミーマーンサー』の研究 (pp. 106-183)、第三部 『プラマーナ・ミーマーンサー』解説研究 (pp. 185-340)、付録 英文論文三篇 (pp. 341-372)、索引 (pp. 373-452)

第一部はジャйна認識論の体系とその発展を概観する。その要点を示せば、

(a) ジャйна教原始聖典には五種類の知 (jñāna) を説いている。
(i) 感官知 (abhinibodhika; mati) (ii) 聖典知 (śruti) (iii) 超直観知 (avadhi) (iv) 他心知 (manahpariyāya) (v) 完全知 (kevala) がこれであり、前二者は間接知 (parokṣa) と呼ばれ後三者は直接知覚 (pratyakṣa) に含まれる。

(b) 時代の推移とともに他学派との交渉が緊密となるにつれて、他学派の学問的傾向を無視できず、それらと同調し得る認識論的体系の形成がはかられた。すなわち、感官に基づく直接知覚を認めることと、プラマーナ(認識手段、正知)の下に知を含ませる他学派との協調が不可欠な要請となった。ウーマースヴァーティは知を間接知 (parokṣa) と直接知 (pratyakṣa) に二分し、それぞれに従来の伝統的な二知と三知を配して、

知をプラマーナと同一視する。

(c) シッダセーナ・ディヴァーカーラ (650-750 A. D.) は知 (プラマーナ) を直接知と間接知に分け、後者に推論と聖典知を含ませる。また前者には真諦的知覚と世俗的知覚を暗に意図している。

(d) ジナパンドラは、感官による知覚を「世俗的知覚」(sāmyavahārika-p.)、感官に基づかない知覚を「真諦的知覚」(paramārthika-p.) と呼んで、直接知覚の中に両者を含ませる。

(e) アカランカ (750 A. D.) に至って、他学派の認識論体系との協調に対する努力の跡が顕著に見られる。直接知と間接知とに二分され、前者には最勝的知覚 (mukhya-p.) と世俗的知覚が含まれ、後者には新しく登場した想起 (smarana)、再認 (pratyabhijñā)、タルカ (tarka)、推論 (anumāna)、聖典知 (āgama) が含まれる。彼以後、ジャイナ教認識論の体系においては従来の伝統的な五知は表面から大きく後退し、他学派の認める認識との対応が追求される。アカランカによるこの組織化がジャイナ教認識の定形として継承されて行き、ヘーマチャンドラの見解も本質的にはこれに従うものである。もちろん、かような体系化と並行して、アーガマに対する注釈的作品には従来の五知に対する考察も継続して行われて行く。

ここで「直接知覚」(pratyakṣa) に対するヘーマチャンドラの語義解釈が紹介される。(1) 間接知 (parokṣa) に対立する「直接知覚」は akṣa = jiva (= ātman) と理解して「ジーヴァナ

わちアートマンに依存する知覚」を意味する。したがって、この解釈は「直接知覚」によってジーヴァに基づく最勝知 (出世間的知覚) を意図している。「間接知覚」はそれ以外の推論等による認識を指す。(2) akṣa = indriya という理解に基づいた語義解釈で、「直接知覚」は感官による世間的知覚を指す。正理学派を初めてとしてインド哲学諸学派で一般に行われている解釈である。以上のように、ジャイナ教のアーガマに説かれる認識論が幾多の変遷をとげ、原作者ヘーマチャンドラによって主張されるまでの過程を詳細にたどっている。

著者は次の点に着目する。何れの学派においても〈pratyakṣa〉とは感官による直観すなわち世間的直接知覚を意味するのが通例であるが、ジャイナ教の新体系に見られる直接知覚には、出世間的直接知覚に加えて世間的直接知覚が含まれる。これはジャイナ教独自の創始になるものか、それとも他学派の影響によるものか。これに関して著者は第三章以下をすべて他学派の詳細且つ広汎な研究に当て、ジャイナ教認識論の体系化に範となり得たものがあったかを追求する。

出世間的知覚を要請したのは世間的認識を超えた出世間的な境地すなわち解脱を志向するがためであろう。したがってジャイナ教認識論体系はそのまま宗教的体系でもある。この出世間的知覚つまり上位の「直接知」(pratyakṣa) が究極の解脱を目指すとして理解する以上、それに含まれる超直観知 (avadhi) と他心知 (manahpariyāya) は解脱達成の手段としてはあくまで不完全知である。完全知こそが究竟知として問題とされ、ジャイ

ナ教認識論では究極的にはこの完全知が中心課題とされる。

《pratyakṣa》は下位の立場では感官に基づく「知覚」であり、上位の立場では感官に基づかない「直接知」ないし完全知を指すと理解して、著者は両概念を含むものとして「直接知覚」という訳語を与えている。ジャイナ教認識論、論理学の性格は、「直接知覚」をあらわす《pratyakṣa》という語の本質にかかわる。また、最勝知である完全知を中心としたジャイナ教認識論およびその変遷を論じ、著者はジャイナ認識論の性格を明確化しようとする。一方、著者は直接知覚に出世間・世間の両知覚を含める体系がジャイナ教独自のものか、或いは他学派の影響によるものかを問題視し、多数の資料を渉猟して他学派の教説との比較を行う。この第一部はいわば「直接知覚」の研究とも言うべきもので、これに著者の最大の努力が注がれ、《pratyakṣa》の語義解釈に始まって詳細且つ広汎な比較研究が行われている。

正理学派においては、アートマンの直接知覚を説き、また後期作品では「ヨーガより生ずる知」以下三種の非世間的知覚(alaukika-p.)を主張するが、これらは解脱に導く知識とは言いがたい。勝論学派においては、ジャイナ教に見られるような世間的知覚とは別に出世間的知覚のごとき類型を見ることはできない。例えばヨーガ行者の知覚、つまりヨーガより生じた法に助けられた高度のアートマンの直観のごときも、一般的な世間的知覚ではないとしても解脱知とは異なるからである。また、ヨーガ学派においては知覚としては有種三昧などの四等至を説

くが、最終的には直接知覚等の止滅が要請されるから、ジャイナ教の新体系の成立に当たってこの学説に範を求めたとは考えられない。

つぎに、著者はジャイナ教の出世間的知覚の類型を仏教の知覚説すなわち現量説の中を探ろうとし、まず古因明を代表する『瑜伽論』に着目する。この中に説かれる現量(直接知覚)は、その区分基準を異にするために多様な分類が行われている。その中で四種の現量が次のように述べられている。感官を基準として、(i)五色根に基づく色根現量と、(ii)意根に基づく意受現量とに、また世間・出世間を基準として(iii)世間現量と(iv)清浄現量とに分類される。(i)と(ii)とを世間現量に含ませる。世間現量は諸法の無常、苦、無我を知覚する点では根本真理を知覚するという意味で清浄な知である。しかし、迷いの生存を離れた出世間的な如実知覚とはいえない。また、他の区分基準に基づいて設定された非已思、思現量はまさに意受現量に同定され得るが、これには二種類がある。一つは名医が与える薬を見て病人が薬の効能を直観するもの、他の一つはヨーガ行者が瞑想に入って自由自在に対象を直観するものである。ともに、現在一瞬における直観であることに変わりはないが、我々の知覚とは大きく異なるものである。したがって、清浄現量が意受現量に該当するばあい(共世間としての清浄現量)と該当しないばあい(不共世間としての出世間知、すなわち如実知見)の二解釈が可能となるが、何れもヨーガ行者の修行体系中に位置づけることができる。つぎに、陳那、法称などに代表される新因明の主

張を考察する。現量として、感官知、意現量、自己認識、ヨーガ行者の知の四種を主張するが、前記の清浄現量は「ヨーガ行者の知」に含まれると見て差支えない。この知については解釈に発展の跡が見られ、最終的には「四聖諦を観ずる修習によって得られる解脱知つまりさとり智慧」と理解されるようになった。

以上の考察から、知覚に最勝的知覚 (*mukhya-p.*) と世俗的知覚 (*samvyaḥarika-p.*) を含ませるジャイナ教の再組織化が、仏教の「世間現量」と「清浄現量」ないしは「ヨーガ行者の知」にその範をとった可能性が大であると著者は断定する。

ジャイナ認識論の此の課題を問題視した研究は今まで皆無であったが、該博な知識を駆使して、あえてこの難問に挑戦された著者の努力に敬意を表したい。本書の中で著者が最も力を注いだのは、第一部における〈*pratyakṣa*〉の問題とりわけこの課題であることが納得される。

第二部においては、著者は原作品の構成と著作年代を論じ、未完成に終わった経緯を諸種の観点から検討する。また、原作者ヘーマチャンドラが意図したと思われる構想を、その内容と他学派とくに正理学派の初期作品と比較することによって精緻な推理を行っている。

第三部は原作品の和訳 (*Pan. I. 1. 1. ~ I. 1. 153*) と詳細な注解から成る。

三篇の英語論文は、「ジャイナ教論理学における勝義的直接知覚——仏教論理学と関連して——」、「瑜伽論における直接知

覚」(「ブラマーナ・ミーマンサーの研究」から成る。これら三篇は第一部、第二部に述べられた内容を極めて明解に概括したもので、まず最初にこの三篇を読まれることを勧めたい。

なお、評者として気づいた点二、三を挙げておきたい。まず〈*pratyakṣa*〉に対する訳語に関して、著者の立場を代弁しておきたい。間接知 (*parokṣa*) に対立する概念〈*pratyakṣa*〉は、感官に依存しない点で「直接知」と理解すべきであろう。すでにウパニシャッドにも〈*parokṣa*〉の対立語として〈*aparokṣa*〉が述べられ、これは〈*āśakt-kārin*〉(直接知)を意味し、また〈*pratyakṣa*〉と同一視されているからである。一方、インド諸学派の認識論で一般に採用されている、感官に依存する日常的な〈*pratyakṣa*〉は「知覚」と和訳すべき性格のものであろう。しかし、この語は認識手段である正知 (*pramāṇa*)、それによって得られる意識内容 (*pramiti*)、その対象 (*prameya*) の何れにも適用され得るもので、インド認識論中で最も多義的に使用される語の一つである。本書で最も大きな核心となっている「直接知」と「知覚」の双方を含む上位の概念を例にとっても、その厳密な和訳は不可能であり、「直接知」と「知覚」を明確に峻別することは更に不可能というべきであろう。したがって、この語に「直接知覚」の訳語を当てているのは著者の苦勞があったものと察せられる。また、ジャイナ認識論が主張する「世俗的」と「真諦的」の区分について一言しておきたい。ウパニシャッドに見られる知識の二区分がそのままこれに該当するか否かは速断できないが、問題とする余地はあるであろう。ジャ

イナ認識論では、「真諦的知覚」は「最勝的知覚」(mukhya-p.)を指すが、厳密な意味での最上位の「究竟知」ではないし、この二分類は知覚のみに使用されている。他方、この分類を主張するものに後期シャンカラ学派がある。認識論としてではなく、あくまでも存在論としての真諦的、世俗的、顕現的(pratibhasika)という三段階の存在性(satta)を認めている。用語の点から見ても、これらの表現は明らかに仏教からの影響と見て間違いないであろう。また知識は必ず判断の形をもって表わされ、それのもつ真理値の主観的・客観的決定が自立的か他立的かを主題とする「真理論」(pramāṇya-vāda)は、インド認識論の重要課題である。著者は〈pramāṇya〉を妥当性と和訳しているが(p. 176 ff.)、二値論理学の立場から見ても、これに対しては「真」の訳語を、〈apramāṇya〉に対しては「偽」の訳語を

当てるのが適切かと思われる。また、前記 Sanghavi には Advanced Studies in Indian Logic & Epistemology という著作があり、その大部分をジャイナ教の論理学と認識論、とくに『プラマーナ・ミーマーンサー』の紹介に当てている。元来、これは原文刊本の序文として書かれたものの英訳であり、著者にはおそらく内容的にも新規な点は感じられなかったと思われるが、後進の便宜のために参考文献として挙げるべきであろう。本書は長期間著者が構想を暖めた研究成果であり、詳細且つ精緻を極めた論考の集成と見ることができよう。ジャイナ教のみならず、広くインド思想の研究を志す者に是非すすめて見たい著作である。

〔一九八八年二月、平楽寺書店、A5版、
二六+三四〇+32+71+4頁、七八〇〇円〕